ファクトブックに掲載されている指標とベンチマークに関する一考察

三　井　規　裕（高等教育推進センター・研究代表者）
江　原　昭　博（教育学部）
永　井　良　二（高等教育推進センター）

要　旨

本稿の目的はファクトブックに掲載されている指標とベンチマークに焦点を当て、現状と課題について明らかにすることである。調査対象は、日本の国立大学、公立大学、私立大学789校（2019年９月時点）とした。調査を行うにあたって、1）ファクトブックの公開状況の確認 2）ファクトブックに掲載されている指標の確認 3）ベンチマークの確認 4）ファクトブックを作成している大学への聞き取りの４つの方法をとった。その結果、ファクトブックに掲載されている指標は共通していたことがわかった。共通していた指標は入試・在籍・就職・卒業状況であった。これらの指標が共通していた理由は既存資料等から収集可能であり、ファクトブック作成にむけて着手のしやすさが影響していたと考えられる。また、ファクトブックを公開している17大学のうち、ベンチマークを掲載していたのは６大学であった。さらに、共通していたベンチマークは入試状況のみであった。ファクトブックで掲載される指標は一定程度共通していたものの、ベンチマークは入試状況しか共通していなかった。ファクトブックは他大学の情報も含むことが一つの特徴である。IR 担当者は、同等もしくは競合校を選定し、各大学が公開している情報を手掛かりにしながら、入試状況以外のベンチマークを検討していく必要がある。

1. はじめに

日本の大学でインスティチューショナル・リサーチ（Institutional Research、以下 IR という）を担当する部署の設置が進んでいる。文部科学省（2019）の調査によると、「全学的な IR を専門で担当する部署を設置」または「専門の担当部署は設けていないが、教職員の併任による委員会方式の組織を設けている」と回答した大学は475大学であった。これは調査に回答した758大学の62.7％を占めている。

IR の役割は大学によって様々ではあるものの、学内外のデータや情報を収集し、分析を行う点において共通している。収集したデータは当然ながら蓄積されていく。この蓄積されたデータを使って、自大学の状況を確認する基礎的指標としてまとめられた冊子がある。所謂、ファクトブックである。ファクトブックは、「教育・研究・財務等に関する大学の事実（fact）を包括的にまとめ、定期的に発行」（佐藤 2009）、「その大学の運営上、重要なデータ（経年、ときには他

大学との比較）を見やすい表やグラフの形に整理し、大学執行部、学部執行部や各現場などへ意思決定や判断の支援のために供されるもの」（嶌田 2015）といわれている。つまり、ファクトブックは執行部や各現場の意思決定支援を目的に、自大学の教育・研究・財務等の指標を中心に掲載し、他大学との比較（以下、ベンチマークという）をまとめたものである。

どの大学でもベンチマークに対する学内のニーズは一定程度あるものの、何をベンチマークするかは明確になっていない。小林・片山ら（2011）は、対象となる大学の背景を考慮せず、ベンチマークを作成することは、一元的な大学の序列化につながる可能性があると述べている。つまり、自大学のベンチマークへのニーズを把握しつつ、対象となる大学の背景を考慮したベンチマークを検討していく必要があると考えられる。そこで、本稿ではファクトブックを Web 上で公開している大学を中心に、ファクトブックに掲載されている指標とベンチマークに焦点を当て、現状と課題について明らかにすることを目的とする。

2. 研究の動向

ファクトブックの果たす機能に着目した研究として、佐藤（2009）は見える化の一方策としてアメリカの大学および日本企業の見える化の取り組みを参考に、IR が作成するファクトブックの果たす機能について検討している。その結果、ファクトブックによる見える化の取り組みは、今後日本の大学経営支援に重要であると報告している。また高田・高森ら（2014）は、九州大学を事例に IR として独自に工夫を施したデータ収集・提供の取り組みについて検討している。その中で、ファクトブックを活用した意思決定支援を実現するための課題としては、意思決定者のニーズを把握する必要があると述べている。この他、ファクトブックの作成と活用に関する先行研究では、自大学の取り組みを参考として取り上げており、ファクトブックを活かして大学執行部、学部執行部や各現場などの意思決定や判断をどのように支援するかについて検討しているものがある（嶌田 2015；土橋・浅野 2015；関・今井ら 2016；山本 2016）。

ベンチマークの実証的な研究としては、小林・片山ら（2011）のベンチマークを用いた大学の質保証の向上を目的としたものがある。この研究では、イギリス・アメリカの状況に示唆を得ながら、Oxford、Cambridge、Harvard、Yale、Stanford、University of California Berkeley、東京大学、清華大学、北京大学の 9 大学を対象に、それぞれの大学の基礎的な指標を使いベンチマークを試みている。

ファクトブックに関する研究は、個々の大学の取り組みや課題に関するもの、海外の大学のベンチマークに関する研究等、徐々に蓄積されつつある。しかしながら、国内の大学で活用されているベンチマークに関する研究は十分に蓄積されているとは言い難い。

3. 研究方法

3.1　調査対象

国立大学、公立大学、私立大学789校（2019年 9 月～11月時点）を調査対象とした。

3.2　調査方法

1）ファクトブックの公開状況の確認 2）ファクトブックに掲載されている指標の確認 3）ベ

ンチマークの確認 4）ファクトブックを作成している大学への聞き取りの４つの調査を行った。

具体的には、1）ファクトブックの公開状況について、2019年９月から11月に各大学の Web ページを閲覧し、公開の有無を確認した。ファクトブックを検索するにあたって、各大学のトップページにある「サイト内検索」から「ファクトブック」または「データ集」と入力した。トップページに「サイト内検索」がない大学は、情報公開ページもしくは、IR に関するページを確認し、類似の資料があるかを確認した。2）ファクトブックに掲載されている指標については 1）で公開していることが確認できた大学のファクトブックから指標を確認し、整理を試みた。3）ベンチマークの確認も 2）と同様の作業を行った。4）作成している大学への聞き取りは、公開している１大学と非公開の１大学を対象に調査を行った。

4. 結果

4.1 ファクトブックの公開状況

ファクトブックを公開している大学は、国立大学・公立大学・私立大学789校のうち17校であった（表１）。具体的には、北海道大学、茨城大学、静岡大学、神戸大学、九州大学、鹿児島大学、岩手医科大学、平成国際大学、昭和音楽大学、桜美林大学、駒澤大学、上智大学、京都外国語大学、久留米工業大学、九州ルーテル学院大学、岩手県立大学、大阪府立大学であった。ファクトブックを検索するにあたって嶌田（2015）の定義である「大学の運営上、重要なデータ（経年、ときには他大学との比較）を見やすい表やグラフの形に整理」を参考とし、できるだけ棒・折れ線等のグラフで経年変化の状況を可視化しているものを対象とした。なお、桜美林大学、大阪府立大学は、グラフによる表現は少なく、表形式や文字情報が多くを占めていた。また、久留米工業大学は、前年度比較が中心であった。

ファクトブックの公開形式は、電子冊子・PDF・Web ページ（静的もしくは動的）にわかれた。動的な Web ページには、公開用に専用のツールを導入しており、閲覧者が確認したい年度や学部の情報を選択し、簡易的に操作できるものもあった。専用ツールを使用していると思われるのは、平成国際大学・駒澤大学・静岡大学・鹿児島大学の４大学であった。

4.2 ファクトブックに掲載されている指標

公開されているファクトブックの指標を表２にまとめた。掲載されている指標は、入学、在籍（学部・大学院）、就職、卒業、研究、社会貢献（産学連携・地域貢献）、国際化の状況、大学運営（教職員数・財務）、ベンチマーク、アンケート結果（学生調査・授業評価・卒業時調査）に関する情報に分類できた。ただし、掲載されている指標は、大学の規模や各大学におけるファクトブックの役割によって、先述の指標全てを掲載しているわけではなかった。

ファクトブックとして公開している大学の中には学生調査・授業評価・卒業時調査などのアンケート結果を中心に作成している状況もみられた。また、大学によって掲載されている情報量に差があった。具体的にファクトブック（冊子形式）のページ数で確認すると、20ページのものから200ページ程度とページ数に差があった。

表１　ファクトブックを公開している大学一覧

大学名	グラフの種類	公開形式	URL	備考
1 北海道大学	・棒 ・折れ線 ・円	Web（静的）	https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/fact/	
2 茨城大学	・棒 ・折れ線 ・円	パワーポイント資料	https://www.ibaraki.ac.jp/generalinfo/factbook/index.html	
3 静岡大学	・円 ・棒 ・折れ線	Web（動的）	https://ir.shizuoka.ac.jp/graph	
4 神戸大学	・棒 ・折れ線 ・円 ・散布図	PDF	https://www.kobe-u.ac.jp/info/outline/datashiryoushuu/index.html	タイトル：「データと資料が語る神戸大学の今の姿」
5 九州大学	・棒 ・折れ線 ・円	PDF	https://www3.ir.kyushu-u.ac.jp/data-info/public/datacollections/factbook_2019	
6 鹿児島大学	・棒 ・折れ線 ・バブルチャート	Web（動的）	https://www.kagoshima-u.ac.jp/ir/	
7 岩手医科大学	・棒 ・折れ線 ・散布図	PDF	http://www.iwate-med.ac.jp/wp-content/uploads/3984e8bc86a5e855b14dba461673db35.pdf	タイトル：「Educational Data Book」
8 平成国際大学	・棒 ・円 ・エリアチャート	Web（動的）	https://www4.hiu.ac.jp/IRdata/basic.php	タイトル：「IR データ」
9 昭和音楽大学	・棒 ・円	Web（静的） PDF	https://www.tosei-showa-music.ac.jp/guide/information/ir/	タイトル：「IR レポート」
10 桜美林大学	・棒 ・折れ線	PDF	https: //www. obirin. ac. jp/about/information_disclosure/factbook.html	表を中心に掲載
11 駒澤大学	・棒 ・折れ線 ・エリアチャート	Web（動的）	https://www.komazawa-u.ac.jp/about/factbook/	
12 上智大学	・棒 ・折れ線 ・円	PDF	https://www.sophia-sc.jp/info/factbook.html	
13 京都外国語大学	・棒 ・折れ線 ・円	PDF	https://www.kufs.ac.jp/public_information.html	
14 久留米工業大学	・棒 ・レーダーチャート	PDF	https://www.kurume-it.ac.jp/kenkyu/ir.html	単年度および前年度比較が中心
15 九州ルーテル学院大学	・棒 ・折れ線 ・円	PDF	https://www.klc.ac.jp/disclosure/pdf/factbook2018.pdf	
16 岩手県立大学	・棒 ・折れ線	PDF	https://www.iwate-pu.ac.jp/factbook2018%EF%BC%88HP%EF%BC%89.pdf	
17 大阪府立大学	・棒 ・折れ線 ・円	PDF	https://www.upc-osaka.ac.jp/about/data/opu_data/	タイトル：「データで見る公立大学法人大阪府立大学」表を中心に掲載

表２　ファクトブックに掲載されている指標

1. 教育		2. 研究		6. ベンチマーク	
入学状況	志願者数（入試別） 入学者数 入学定員充足率 志願倍率 出身校所在地別入学者数（入学割合） 出身校所在地別入学者数（前年度比） 所在地高校出身入学者数・入学割合 所在地高校出身入学者数割合（推移） 留学生入学者数割合	研究	科学研究費助成事業 競争的外部資金		志願倍率・入学定員充足率（学部別） 就職先（ランキング（他誌）または設置者別平均） 国際（ランキング（他誌）または設置者別平均） 評価（ランキング（他誌）） 規模 学士課程入学者の出身地域別入学状況
在籍状況 学部	学生数 外国人学生数 休学者数・休学率 留年者数・留年率 GPA 分布 TOEFL-ITP インターンシップ	3. 社会貢献		7. アンケート結果	
		産学連携 地域貢献	共同研究 受託研究 奨学寄附金 産業財産保有件数 協定 公開講座		学生調査 授業評価 卒業時調査
		4. 国際化			
		国際化	外国人研究者受入数 教職員海外渡航者数 大学間学術交流協定に基づく交流実績 学生海外研修実績		
大学院	学生数 外国人学生数 休学者数・休学率 留年者数・留年率 就職率・進学率・不安定雇用率 就職率（学士） 地区別就職状況（学士） 就職率・進学率・不安定雇用率 就職率（修士・博士） 地区別就職状況（修士・博士） 卒業者数（学部全体） 卒業者数（学部別） 資格取得状況	5. 大学運営			
		教職員数	教員数 女性教員数 外国人教員数 職員数 女性職員数 外国人職員数 収入 支出 図書館・入館者数 図書館蔵書数		

表３　ベンチマークをファクトブックに掲載されている大学とベンチマーク

大学名	主なベンチマーク（1）	主なベンチマーク（2）
1 北海道大学	・学士課程入学者の出身地域別入学状況 ・就職率・留学生数等（設置者別平均との比較）	—
2 神戸大学	・大学の規模比較 ・世界ランキング ・志願状況の比較 ・各種資格試験合格状況 ・研究論文・科学研究費助成事業 ・企業共著論文	・外国人留学生受け入れ ・ダブルディグリー、ジョイントディグリープログラム ・国際化の状況 ・財務状況
3 九州大学	・大学の規模比較 ・人気企業就職 ・世界ランキング ・学長からの評価 ・社会人からの評価 ・高校からの評価 ・政財界への人材輩出 ・子供に入学してほしい大学	・一般入試合格者入学の比率 ・各種資格試験合格状況 ・論文の量と質 ・学生の海外派遣状況 ・産学連携 ・財務状況 ・科学研究費助成事業
4 鹿児島大学	・志願倍率 ・入学定員充足率	—
5 岩手医科大学	・志願状況、合格者の入学比率	—
6 京都外国語大学	・ブランド力調査	—

表４　聞き取り内容まとめ

	A 大学	B 大学
公開状況	公開	非公開
現在の作成目的	主に、大学経営・認証評価の根拠データとして活用	学部の教育改善への活用
公開の経緯	・2012年から冊子として作成をしていた。2017年から Web に切り替えた。その際既に公開されているデータをまとめたものであることから学外に公開した	―
学内での活用状況	・大学執行部等に報告 ・他部署からデータ提供の依頼対応については学内限定でファクトブックに掲載しているデータをダウンロードできるようにしている。各部局で現場の課題に応じて活用していると認識している	・ファクトブックをもって、各学部執行部に状況の報告を行っている。経年比較だけでなく、今後は少し踏み込んだ分析結果も報告していくことを考えている
その他	・大学概要、学校基本調査、大学情報データベースを活用し、基本的には公表されているデータをもとに作成を開始した。見える化は行っているが、その先の活用等については今後検討を続けていく	・IR がどのようなデータをもっており、何を可視化できるか示したかった。そこから何ができるかを考えていくようにしている ・今後はファクトブックの初めのページに特集として統計的に処理したグラフ等を掲載していくようにする

4.3　ベンチマーク

ファクトブックにベンチマークを掲載していたのは17大学のうち６大学であった（表３）。具体的には、北海道大学、神戸大学、九州大学、鹿児島大学、岩手医科大学、京都外国語大学であった。そのうち、神戸大学と九州大学は、入試状況、世界ランキング、社会からの評価など多様な視点からベンチマークを掲載していた。また、１大学を除いて共通していたベンチマークは、入試状況（志願者数・合格者数・入学者数等）であった。

4.4　ファクトブックを作成している大学への聞き取り調査

ファクトブックを Web に公開している１大学と非公開の１大学に聞き取り調査を行った。主な質問項目は、ファクトブックの目的、公開に至った経緯（公開している大学のみ）、学内での活用状況である（表４）。それぞれの大学の作成目的は、A 大学が、大学経営・認証評価の根拠データとして活用、B 大学は、学部教育改善への活用であった。

まとめ

本稿の目的はファクトブックを Web 上で公開している大学を中心に、ファクトブックに掲載されている指標とベンチマークに焦点を当て、現状と課題について明らかにすることであった。

ファクトブックに掲載される指標は一部共通していたことがわかった。共通していた指標は入試・在籍・就職・卒業に関する情報であった。こうした共通点があった理由として、関・今井ら（2016）は、IR で収集しているデータから作成可能で、指標化しやすい数値データをファクトブックに活用していると述べている。また、嶌田（2015）は、大学概要等既存の資料を参考に、８年分のデータを用いてグラフを作成したところ、大学執行部から継続的に作成するよう指示を受けたと述べている。つまり、大学がこれまで蓄積していたデータの中から既に外部に公開されていたものをファクトブックに活用していると思われる。聞き取り調査においても、すでに何らかの形で公表されているデータであるため、ファクトブックとしてまとめ、外部に公開したとの

意見も聞かれた。したがって、これらの指標は既存資料等から収集可能であり、ファクトブック作成にむけて着手のしやすさがあるため、一部ではあるものの共通性が見られたといえる。

ファクトブックを公開している大学に限られるものの、ベンチマークは17大学のうち6大学で掲載されていた。その内、多様な視点からベンチマークを作成しているのは神戸大学と九州大学のみであり、6大学のうち5大学で共通していたベンチマークは入試状況のみであった。なぜ、ベンチマークは共通する項目が少ないのだろうか。その理由として、白石・橋本ら（2017）は大学の内部情報の多くは各大学の文脈によって形成されたものが多いと述べている。また、各大学の文脈を考慮しつつベンチマークを提示するためには、大学というレベルでの比較でなく、学部学科単位でベンチマークを構築する必要があると報告している。小林・片山ら（2011）は「大学に関する定量的な指標が公開され、大学間で比較が行われると、背景やコンテクストを無視して、一元的な大学の序列化が起こる可能性がある」ことを指摘している。すなわち、入試状況以外のベンチマークを作成するには、各大学の背景や文脈を考慮しつつ、学部学科単位ごとに作成していく必要があると考えられる。

以上、現在公開されているファクトブックの現状と課題について検討した。

その結果、ファクトブックに掲載される指標は、一部共通していたことがわかった。またベンチマークは6大学で掲載されていたものの、入試状況しか共通していなかった。ファクトブックは他大学の情報を含むことが一つの特徴である（嶌田 2015；浅野 2017）。IR担当者は同等もしくは競合校を選定し、各大学が公開している情報から比較できる学部学科を絞り込みベンチマークを検討していく必要があるといえよう。

今後の課題

本研究では、ファクトブックをWebで公開している大学を中心に調査を行った。各大学のファクトブックの公開状況を検索していると、非公開ではあるが、ファクトブックを作成していると思われる文書記録等が見つかった。今回は公開している17大学の情報をもとに分析を行ったが、今後非公開の大学に対象を広げ調査を続ける必要がある。

謝辞

本研究は2019年度関西学院大学高等教育推進センター共同研究助成をうけて実施されたものです。また、調査にご協力いただきました他大学IR関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

文部科学省（2019）平成28年度の大学おける教育内容等の改革状況について（概要）.
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336.htm　2020年6月20日閲覧

佐藤仁（2009）大学経営における「見える化」の一方策 ―大学のファクトブックに着目して―. 大学評価研究　Vol. 8　pp. 65-73

嶌田敏行（2015）ファクトブック作成に向けた大学概要の活用について. 大学評価とIR　第1号　pp. 31-38

小林雅之・片山英治・劉文君（2011）大学ベンチマークによる大学評価の実証的研究. 東京大学大学総合教育研究センター

高田英一・高森智嗣・森雅生（2014）IRにおけるデータ提供と活用支援のあり方について ―九州大学版ファ

クトブック「Q-Fact」の取組の検証を基に―．大学評価研究　第13号　pp. 101-111
土橋慶章・浅野茂（2015）評価・IR 業務で収集した情報の効果的活用に係る一考察～神戸大学におけるデータ資料集の作成を通じて～．大学評価と IR　第 1 号　pp. 5-14
関隆宏・今井博英・小田美奈子（2016）「新潟大学ファクトブック2015」の作成について．大学評価と IR　第 5 号　pp. 44-52
山本幸一（2016）設立初期の IR オフィスにおける意思決定支援の効果的運用に係る検討～明治大学におけるファクトブックの作成を通じて～．大学評価と IR　第 6 号　pp. 12-20
白石哲也・橋本智也・十河功市・下山孝宏（2017）女子大学のベンチマークの試み．第23回大学教育研究フォーラム発表論文集
浅野茂（2017）ファクトブック・データ集とは？ ～解説と実践事例の紹介～．大学評価・IR 担当者集会 2017　全体会　話題提供資料